

六 面 観 音

むかし、むかし。

家山にある野守の池の水は、雨が降るたびにあふれました。大雨がふれば池の水ばかりではありません。大井川も堤防をきって、ドドツと村をおそうのでした。そのため、畑や田んぼの作物は流されるし、家の中は水びたしになるし、それはそれは村のしゅうはこまっていました。

そのころ、村にはたいへんうすきみの悪いことがありました。

それは、ときどき夜になると池のはたで、ボワーツと青白い光がたちのぼり、きみ悪く池の水面をてらし出すのです。この光が出ると、ふしぎなことに、きまって次の日から雨が降り出し池や川の水があふれ出して、村は大水におそわれるのでした。

「池のはたから出るきみの悪い光は、何ずら？」

「いつも、大雨の前の晩に出るみたいだなあ。」

「墓場に出る火みたいだぜん。」

「だれか、人でもうめたずらか。」

「それにしても、うすきみん悪いなあ。」

だれもが、大雨の前に出る光には、ふしぎがっていました。なんにしてもきみの悪いことだと、よほどのことがないかぎり、池の向う岸には近づこうとはしませんでした。

ある日のこと。村の若いしゅうが集まって、池のはたの話になりました。

「何ずら、何かあそこにうまってるじゃあないずらか？」

「あの光りぐあいじゃあ、金でもうまってるかも知れんなあ。」

「そうだかも知れん。」

金だ、小判だということになると、もう、うすきみが悪いなんていつていられません。それにいせいのいい若いしゅうのこと、

「ほってみずかい。」

ということになり、若いしゅうはくわをかついでさっそく池のはたへ出かけてゆきました。

「この辺だっけなあ。」

「もうちつとこっちじゃあないか。」

「どうだ、小判は出てこんか。」

そんなことを言いながら、あっちだ、こっちだと、あたりをほじくり返してみましたが、何も出てきませんでした。出るのは、石ころばかりでした。

「何にもでてこんじゃないか。」

「場所んちがうじゃないか。」

「やっぱ、光ん出てるときに来にゃあ、場所はわからんなあ。」

「そうしぎあ。これじゃあ、くたびれもうけだ。」

若いしゅうは、次の光が立ちのぼるときにまたほることにして、それぞれくわをかついでひきあげていきました。

それから、何日かののち、夕方からどす黒い雲が空一面をおおいはじめました。

村の若いしゅうは、ふたたび集まりました。

「おいおいっ！へんな空もようになってきたぞ。」

「今夜あたり出そうだなあ。」

若いしゅうはくわをかついで、池をみおろす小高い丘の上へのぼりました。もう日はくれて、黒い雲はすっかり空をおおいつくしていました。くらやみがあたりをしずかにつつみ、池の水面もやみの中にとけこんでいきました。

里のともしびが、一つ二つともりはじめました。若いしゅうは、地べたに腰をおろし、まっくらな池をながめて、今か今かと光が立ちのぼるのを待っていました。

どのくらい時がたったでしょう。突然、バサバサツと近くで音がしました。若いしゅうは、ギクツとしてくらがり顔を見合わせました。

「カアツカアツカアツ」

「からすか。」

一同むねをなでおろしました。その後も夜がらすが何羽もなき出しました。

「ばかに、急にからすのやつんさわぎはじめたなあ。」

「あいつあ、昼間だっついやなやつだ。夜なかれると、よけいにたまらんなあ。」

「まったくだ。」

若いしゅうが、そんな話をしている時、池の向う岸から、ポーツと青白い光がたちあがりました。池の水面が、青黒いかがみのように光りはじめました。

「あっ。」

「出たっ、出たっ。」

「あそこだ。あそこをほりゃあよいぞ。」

「それ急げ。」

若いしゅうは、急いでくわをかついで丘をくだり、田んぼのあぜを駆けぬけ、池のほとりをまわって、光の出ている向う岸へと向いました。近づいてみると、木の根元からポーツと光の柱が立ちのぼっていました。

「それっ、そこだ、そこをほれ。」

若いしゅうは、一生懸命ほりました。なかの一人が、光の根元にくわを入れると、光はパツと消えて、ふたたびしんのやみになりました。

「あれっ。」

「消えちまったぞ。」

「まっくらで、なになんだか、さっぱりわからん。」

「火をもせ、木をはやく集めよ。」

若いしゅうは、手さぐりであたりにあった木をあつめ、火をつけました。パチパチパチッ火がもえ出しました。

「火を消さんように、火の番をするしゅうと、ほるしゅうにわかれてやらざあ。」

「ほいじゃあ、おれとおまえんほって、あとのしゅうは、火を消さんようにしてくりよう。たのむぞ。」

「よっこらしよ、よっこらしよ。」

「それ出てこい、大判、小判。」

こんなことをいいながらほっていると、ひとりの若いしゅうのくわの先が、コツツと何かにあたりました。



「何かあったぞ。」

「えっ、あったか。」

「あかりをもってきてくりよう。」

ひとりが火をぼうきれにうつして、たいまつがわりにもってきました。

「なんだ、石んみたいだぜん。」

「なに、ほりだしてみにやあわからん。」

若いしゅう^{わか}は、せっせと土をかき出し、どろまみれの大きな石をほり出しました。

「やっぱし、ただの石か。」

がっかりしながら、石の土をはらいのけたひとりが、

「あれっ！何かがきざんであるぞ。」

とあかりをよせてみました。

「どれどれ。」

若いしゅうは、のぞきこみました。すると、石には六つの顔をもった観音さんが、きざんでありました。

「なんだ。どろまみれの観音さんか。しょんない、しょんない、一文にもなりやあしんわあ。」

「そこらへんへ、ざぼおっておきやあよいわあ。」

「そいだけえが、あの光りやあなんだっけだら。」

「よいわあ、そんなことあ。何にも出んけだで。雨も降ってきたし、ずんずん帰らざあ。」

若いしゅうは、そういって、ぬれながらがっかりして家に帰っていました。

そして、よく日、

朝からどしゃ降りの大雨になり、池の水はあふれあたりの田んぼや畑は水びたしになり、大井川の水もみるみるうちに水かさをまして、昼ごろにはつつみをやぶり、ドドドドッと村の中にいきおいよく流れこんできました。

「おおい、つつみんきれたぞう。」

「山へにぎょうよう。」

村は、今までにない大水に大さわぎになりました。

雨がやんで、水がひき、三、四日たったころ、村のしゅうはつつみをなおす仕事に出ました。

仕事すすむと、村のしゅうはよりあつまって相談しました。

「これっから、こんな大水にやられちゃあ、たまらんなあ。」

「つくり物は、だめんなっちまうし、困ったこんだ。」

「あんな大水をおさえられる土手をつくるのもたいへんだなあ。」

「川ばっかじゃない。池の水があふれ出るにやあ、まいっちまう。」

村のしゅうは、これからどうしたらいいものか相談し合いました。

そのうち、ひとりがいきました。

「川の土手に水をしずめてくれる観音さんを、おまつりしたらどうぞら、

それで二度とこんなにならんようにお願ひしてみりやあ……。」

「そうだなあ、それんよいかもしれんなあ。」

さっそく村のしゅうは、石屋にたのんで、観音さんをきざんでもらう

ことにしました。

何日かして、まあたらしい観音さんができあがりました。

「わあっ、りっぱな観音さんができたなあ。」

村のしゅうは、よろこんで川を見おろす土手の上に、観音さんをまつりました。

ところが、つぎの日の朝、村の若いしゅうが、土手にいってみると、

きのうまつったばかりの新しい観音さんが、どろまるけのきたない観音

さんにかわっていました。

「なんだこりやあ。」

そのきたない観音さんは、池のはたで若いしゅうにほり出され、ほ

おっっておかれた六面観音さんだったのです。その若いしゅうは、きつね

にでもつままれたかのように、目をばちくりしていました。

そのうちに、これは大変とばかり、村のしゅうに知らせに走りまわりました。

「たいへんだあ。新しい観音さんがどっかへ行っちゃったあ。」

若いしゅうは大声で村じゅうに知らせまわりました。

「そんなばかなことがあるもんか。」

「だれも、観音さんをもっていくこともあるまいに。」

村のしゅうが、がやがやいいながら、土手の上に行くと、なるほど若いしゅうのいう通りでした。

村のしゅうはおどろきました。

「いったい、これはどうしたことだ。」

「このきたない観音さんが、新しい観音さんを追いはらって、自分がちよこんとここへいすわったのかのう。」

「きみようなこともあるもんだ。」

首をひねりひねりそんな話をしていると、ひとりの男が、ひぎをたたいていいました。

「こりゃあ、池のはたから若いしゅうがほったという観音さんじゃのう。いままで、池のはたで、大水が出る前の夜、光を出していたのは、この観音さんじゃないか。わしらに、大水がでるぞとおしえてくれたのじゃ。きつと。」

村のしゅうも、そうそう、そうだったのかと気がついて、六面観音さんをだいじにおまつりすることにしました。

それからは、もう、池のはたから光が立ちのぼることもなくなりました。

この観音さんが、大水をびたりとおさえて、村を守りつづけたということです。